

# 保育者養成における音に対する感性を育む試み —「幼児と表現」での授業実践を通して—

長島 佳奈\*

2024年12月26日受理

## I. はじめに

### 1. 研究の背景と目的

幼児期の子どもたちは、身のまわりの音に対して豊かな感受性を持ち、生活や遊びの中で出会う様々な音に興味を示し、独自のオノマトペで表現することがある。筆者もこれまで、保育園での子どもたちとの触れ合いや自身の家庭での経験を通じて、子どもたちが音を楽しみながら表現する姿を目にしてきた。例えば、偶然触れた物の音を独自のオノマトペで表現しながら叩き続けたり、「こっちはどうだろう？」と別の物を叩いて音を探ったりする姿が見られた。また、散歩中には、大人が聞き逃しそうな音にも関心を持ち、空を飛ぶ飛行機を指さして「ぶーん」や「ごーごー」などと言葉にし、その後、呟きながら飛行機などを絵に描いてさらに楽しむ姿もあった。子どもたちが音を自分なりの言葉で表現し、それを絵などでさらに広げる様子から、音への感受性の豊かさと表現力の伸びやかさを感じることができた。

こうした子どもたちの身近な音や現象への感受性を大切にし、さらに豊かにしていくために、保育者は、子どもたちが自然の中の音や物に触れた時に鳴る音など、様々な音を感じられる体験を増やせるよう環境を整えることが大切である。また、子どもの気づきや表現に寄り添い、共感をもって関わる姿勢も求められる。こうした関わりを通して、子どもたちは発見する喜びや探究心を育み、身のまわりの音や現象に対する感受性がさらに豊かになり、自身の表現力を伸ばす土台を築いていくと考えられる。これらのことは、平成29年改訂の『幼稚園教育要領』における領域「表現」の内容の取扱い「豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師

と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気づくようにすること」<sup>1)</sup>と示されていることから読み取れる。さらに、子どもにとって身近な存在である保育者自身が、周囲の音に関心を持ち、じっくりと耳を傾け、そこから感じたイメージをオノマトペや色、形、音などで表現してみる経験を持つことも大切である。

そこで、保育者を目指す学生が音に対する感性を育み表現する試みとして、O短期大学1年生の授業科目「幼児と表現」の2コマ目から4コマ目（本稿では第1回から第3回とする）の全3回において、「音を想像・創造する表現活動」を実施した。本稿では、この「音を想像・創造する表現活動」の実践について報告し、その学習の効果と課題について述べる。

### 2. 先行研究

横山(2019)は、保育内容領域「表現」の授業における「音の散歩道づくり」の活動を通じて、学生たちが保育者の視点から何を学んだのかを分析し、この活動の教材性について考察する手がかりを得ている。「音の散歩道づくり」とは、教師が提示した楽器やその他の素材を用いて音を探求することから始まり、次に学生たちが持ち寄った既成の楽器や音の出る素材で作成した楽器の音やイメージを共有し、それらを組み合わせることで物語性のある数場面の「音の散歩道」を考え、表現する活動である。学生たちのアセスメントシートの記述をカテゴリー項目に分類し、定量的に分析した結果、保育者の視点から見たこの活動の意義として、以下の2点が明らかになった。①多彩な音に耳を澄ませることで音への気づきが生まれ、想像力が触

\*大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

発され、幼児の内面が育つこと、②音色に対するイメージの共有が活性化し、幼児同士の関わりを通じて共感が生まれることである。この結果から、「音への気づき」「想像力」「イメージの共有」「共感」といったキーワードに基づき、保育者養成課程における「表現」の授業で学生の気づきを促す教材としての「音の散歩道づくり」の可能性を深く考察する手がかりが得られたとしている<sup>2)</sup>。

続いて横山(2020)は、保育者養成課程の授業デザインに関する示唆を得ることを目的に、教員免許状更新講習の開講科目「幼児と音楽表現」の授業を受講した保育者が、「音の散歩道づくり」という活動を通じて行ったリフレクション(振り返り)の特徴を分析した。本研究では、KJ法およびKW分類法を参考に分析を行い、以下の3点がリフレクションの特徴として挙げられた。①保育者が物的・心理的環境を構成することの重要性を再認識していること、②理論と実践を関連付けて振り返りを行っていること、③従来の保育実践における音楽活動を見直し、新たな気づきを得ていることである。これらの結果を踏まえ、保育者養成課程における授業デザインでは、理論と実践を往還させながら深い学びを促進する仕組みを構築することの重要性が示唆された<sup>3)</sup>。

以上、横山の研究からは、「音への気づき」や「共感」を育む活動の重要性、ならびにそれを活かした保育者養成課程の授業デザインの可能性が明らかとなっている。

### 3. 研究方法

2024年度の授業科目「幼児と表現」の第1回から第3回を通して、「音を想像・創造する表現活動」の学生の学習の様子と振り返りシートの記述から、この表現活動の具体的な効果について考察する。

## II. 授業実践

### 1. 授業の概要

2024年9月から2025年2月にかけて開講された授業科目「幼児と表現」は、複数の教員で担当している。全15コマのうち、2コマ目から4コマ目が本稿にかかる筆者担当の授業実践であり、0短期大学保育者養成課程1年生23名(男5名、女18名)を対象に、授業を実施した。

倫理的配慮に関して、学生には、振り返りシートの

記述内容は授業評価に影響しないこと、個人情報に関する事項については明かさないことを伝えており、初回の授業時に一連の取り組み内容とその成果について論文として発表することの了承を得ている。

筆者担当授業の全3回の大まかな授業内容を以下の表1に示す。

表1 「幼児と表現」の授業時程と内容

回	内容
1	身のまわりの音集めをし、ワークシートに記録する。グループで意見交換し、聴こえた音のイメージを絵に描き、自然物や廃材、楽器等を用いた音の表現を考える。
2	第1回で描いた絵からイメージされる音づくりを考え、音の表現に向けて準備する。音づくりを行う際、身近にある自然物、生活素材、楽器等を用いた表現にする。
3	これまでに創作した造形表現・音楽表現をグループごとに発表をする。第2～3回の創作活動と発表の振り返りを行う。

第1回では、学生はグループに分かれ、大学内の特定の場所へ出かけ、そこで聴こえる音についてオノマトペで表現し、匂いや色、感触などもワークシートに記録した。また、スマートフォンなどを使って音を録音し、聴こえた音をデータとして残すことも可とした。その後、教室に戻ってグループ内で意見交換を行い、どんな音が聴こえたかを共有した。次に、聴こえた音のイメージをB4サイズの画用紙に絵で表現した。表現の際には、筆者が用意したマジック、クレヨン、色鉛筆、折り紙、糊を使い、必要に応じて他の材料も自由に取り入れられるようにした。そして、ワークシートに記録したオノマトペや描いた絵をもとに、自然物や廃材、楽器等を用いてどのように音を表現したらよいか構想した。

第2回では、第1回に描いた絵について、聴いた音のイメージが視覚的に伝わる表現になっているかをグループごとに再度確認した。音の響きがしっかりとした線で描かれるようなはっきりした音だったのか、または輪郭がにじんで淡い色合いで表現されるような優しい音だったのかなど、意見交換しながら見直しを行った。絵やオノマトペを通じて音のイメージをさらに深めた後、身近にある自然物や生活素材を使って手作り楽器を製作したり、既存の楽器を固定観念にとらわれない奏法で鳴らしたりして、音の表現の工夫を考案した。また、発表の際に音の進行や音の重ね方についても計画を立て、ワークシートに記録した。

第3回では、まず、グループごとに発表に向けて、音の進行や重ね方を記録したワークシートをもとに練習を行った。発表の際には、絵を見せながら音を表現した後、描いた絵の元となった場所について、どのような音が聴こえたのか、なぜその色や線で表現したのか、さらに音で表現するためにどのような工夫をしたのかについても言葉で説明した。グループごとの発表後は、他のグループの発表を鑑賞して感じたことや気づいた点、また、全3回にわたる表現活動を通じて自身が感じたことや学んだことを振り返りシートに記述した。

## 2. 第1回の表現活動の様子

学生たちは、教室の座席順に基づいて3～4人の5つのグループに分かれ、大学内の特定の場所で活動を行った(15分間)。各グループは、事務室、噴水付近、駐車場、図書館、図書館の自習室側に移動し、そこで聴こえる音について静かに耳を傾けてオノマトペで表現し、それらをワークシート(図1参照)に書き込んだ。また、音を聴きながら感じた匂いや色、形、感触などについても書ける範囲で記録した。目を瞑って暫く音に没頭したあとに、スムーズにワークシートに記入する学生がいる一方で、首をかしげて悩みながら考え込む姿も見られた。また、一部の学生はスマートフォンを使って音を録音していた。

教室に戻った後、グループ内でワークシートをもと

に「どんな音が聴こえたか」などについて意見交換を行った。この中で、飛行機の音を「ぶおー」と表現する学生や「ジージー」と表現する学生がいたり、風鈴の音を「チリンチリン」や「リーン、リリン」と書いたりする学生がいるなど、同じ対象の物に対して様々なオノマトペの表現が見られることが分かった。

その後、学生たちは感じた音のイメージをB4サイズの画用紙に絵で表現する作業に取り組んだ。しかし、どのように描けばよいか戸惑う様子が各グループで見られた。筆者は具体例を提示するとイメージが固定化される恐れがあると考え、「ワークシートに記録した匂いや色、形、感触などを参考にしながら、自由に思うまま描いてみてください」と助言し、学生たちの創造性を引き出すことに努めた。最初は悩んでいた学生たちも、「風は灰色でぐるぐるした感じ」といった意見を出し始め、色鉛筆やクレヨンを使って徐々に表現を進めるようになった。活動が進む中、事務室で音を聴いていたグループからは「お花紙のようなものはありませんか?」という声上がり、用意された材料以外のアイテムも取り入れて表現を工夫する積極的な姿勢が見られた。その後、他のグループからも「毛糸のようなものが欲しい」などの要望が挙がり、使用する素材のバリエーションが増えていった。しかし、どのグループも使用する材料が似通っていたため、最終的に作品全体の表現がやや均一化する結果となった(図2～図6)。



図2 事務室のグループの作品



図3 噴水付近のグループの作品

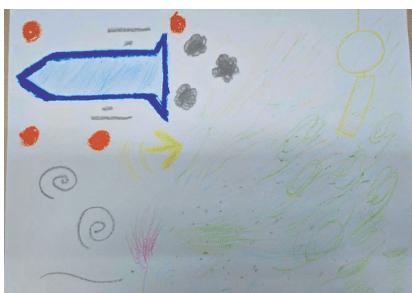


図4 駐車場のグループの作品



図5 図書館のグループの作品

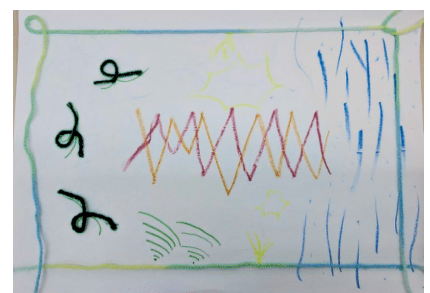


図6 図書館(自習室側)の作品



### Ⅲ. 学生による振り返りシートの記述内容の分析

#### 1. 自由記述の分析にあたっての準備

本取り組みを通して、学生個々に発表後に自由記述による振り返りシートの回答を求めた。具体的には、「第1回から第3回の一連の表現活動を通して、自身が感じたことや気づいたことを述べなさい」という質問を行った。実施した振り返りシートの記述内容について、ワードの出現率および抽出語同士の関連性を要約提示するため、共起ネットワーク分析を行った。

分析の手続きとして、自由記述データをExcelデータ化し、データの有無を確認するために前処理を行った。強制抽出語は「身につく」、「表現活動」、「手作り楽器」、「人それぞれ」とし、使用しない語としては、学生の感想や思いにあたる「思う」、「感じる」や、今回の分析にはあまり意味をなさないと判断した語「ワンワン」、「授業」とした。

表2は、KH Coderの処理によって最終的に自由記述データの分析に使用される語句を抽出したものである。

表2 自由記述データの分析対象

総抽出語数（使用）	異なり語数（使用）
3,208 (1,250)	408 (299)

総抽出語数とは、分析対象ファイルに含まれている全ての語の延べ数であり、異なり語数とは何種類の語が含まれているかを示す数である。また、カッコ内の分析に使用される数値は、分析の対象としてKH Coderが認識している語の数であり、助詞や助動詞のようにどのような文章の中にもあらわれる一般的な語が除外されている。

#### 2. 語彙頻度による分析

自由記述について、抽出語がどのような頻度で出てくるのか傾向を把握するため、出現数を算出（3回以上）ところ、64語が分析対象となった。その出現頻度を表3に示した。具体的には、「音」、「表現」、「聞く」、「聞こえる」、「楽器」、「子ども」といった語の頻度が高いことが示された。

表3 抽出された頻出後（64語）と出現回数（3回以上）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
音	150	意識	11	簡単	5	イメージ	3
表現	58	知る	10	機会	5	一つ	3
聞く	45	絵	9	形	5	感じ取る	3
聞こえる	29	自分	9	見つける	5	嬉しい	3
楽器	28	面白い	9	実際	5	傾ける	3
子ども	22	気づく	8	手作り楽器	5	考える	3
たくさん	17	仕方	8	書く	5	試行錯誤	3
色々	17	耳	8	場所	5	自由	3
違う	16	人	8	身の回り	5	周り	3
活動	16	風	8	それぞれ	4	澄む	3
グループ	14	外	7	工夫	4	大人	3
楽しい	14	生活	7	他	4	大切	3
使う	14	作る	6	当たり前	4	伝える	3
普段	14	自然	6	発見	4	日常	3
オノマトペ	13	発表	6	鳴る	4	飛行機	3
難しい	12	表す	6	話し合う	4	力	3

#### 3. 共起ネットワーク分析

単語の関連性を可視化することのできる共起ネットワークを利用し分析した結果が図8である。共起ネットワークの出力に際して、語の最小限数は「3」、描画する共起関係の絞り込みを上位60に設定して行った。この図において、円の大きさは、語の出現回数を示しており、語を結ぶ線の太さは共起関係の強さを示している。サブグラフを囲む線については、筆者が加筆した。共起ネットワーク分析の結果、出現数の多い語、かつ強い共起関係をもつ内容として、大きく11個のサブグラフが示された。

まず、01グループでは、「大切」「日常」「機会」との関連性が特に強く、学生の記述には、「音を聞くということを日常から大切にしていきたい」、「普段から音に耳を澄ませて聞いてみるという機会を大切にしたい」などの内容が見られた。このことから、学生が日常生活の中で音を意識的に捉える姿勢を育み、音を聞く（聴く）ことの大切さを改めて感じていることが読み取れた。

また、02グループでは、「耳」「たくさん」「人」「普段」との関連性が強い。学生の記述には、「耳を傾けることで、色々なものからたくさん音が出ていると

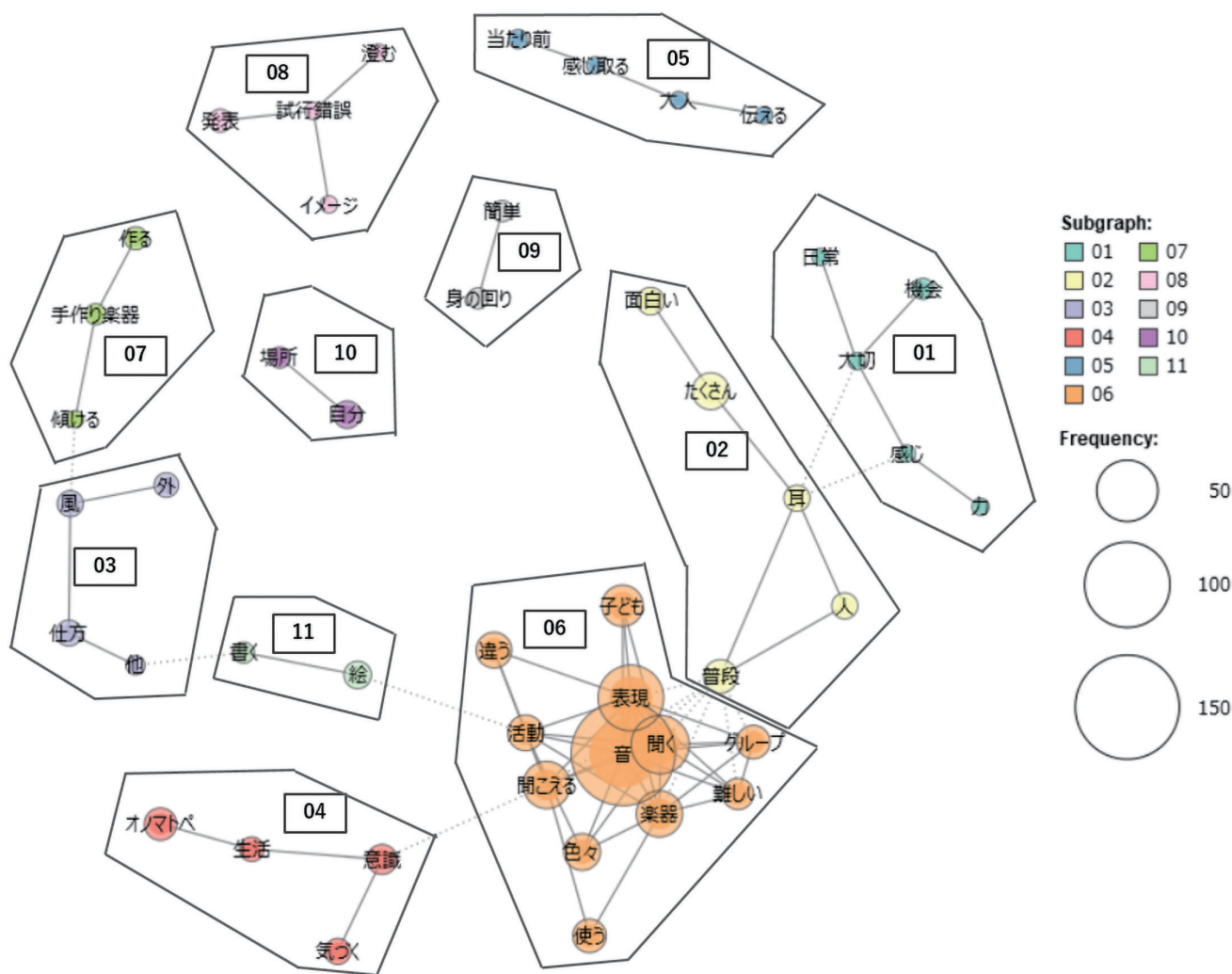


図8 学生の振り返りシートの記述内容に関する共起ネットワーク図

いうことに気づいた」、「人によって聞こえる音の範囲について違いが見られた。足元の音を中心に聞いて、落ち葉や虫の声を聞いている人もいれば、風鈴や飛行機など空の音を中心に聞いている人もいた」などの内容が見られた。このことから、学生たちが音に対する意識を深め、普段の生活の中で当たり前だと思っていた環境音にも新たな発見を得ていること、また、個々の音の捉え方や注目する視点の違いを通じて多様な感性を共有していることがうかがえる。

03グループでは、「仕方」「風」「他」「外」が特に関連性が強く、学生の記述には「表現の仕方はみんな違うんだと知った」、「同じ場所でも、聞いているものが異なっており、音の表現の仕方や楽器の鳴らし方にも違いがあって驚いた」、「風っぽい音にも様々な種類があり、エアコンや扇風機の風、外の風など、さらに細かく分けていくとその中にも多様な音があることを知った」といった内容が見られた。このことから、学

生たちが音を細分化して捉える力を養い、同じ音でも人それぞれ異なる解釈や表現方法があることに気づいていることがうかがえる。また、音に対する理解がより具体的かつ多角的になり、多様な視点を受け入れる姿勢が育まれていることが読み取れた。

04グループでは、「生活」「オノマトペ」「意識」との関連性が特に強く、学生の記述には、「聞こえた音をオノマトペで表現することで、その音がより鮮明に記憶に残ることがわかった」、「オノマトペを活用することで、改めて音の特徴を深く理解できた」といった内容が見られた。このことから、音の捉え方において、オノマトペは音の特徴を具体的に表現する有効な手段であり、それを通じて音への理解が深化し、日常の音に対する意識が高まっていることが読み取れた。

05グループでは、「大人」「伝える」「感じ取る」「当たり前」との関連性が強く、学生の記述には、「大人にとって当たり前のことでも、子どもたちは全然知ら

ないので、音を楽しむことが子どもたちにとって新鮮で楽しい発見になる」、「子どもたちに音の面白さを伝えたい」などの内容が見られた。このことから、子どもたちは音を通じて新たな発見をし、大人の視点では気づきにくい感性を持っていることに学生は気づいたことがうかがえる。また、学生たちはその感性を尊重しつつ、音の魅力を子どもたちに伝えたいという意識を深めていることが読み取れた。

最も出現頻度の高い抽出語である「音」を含む06グループでは、「表現」「聞く」「楽器」「聞こえる」との関連性が特に強い。学生の記述には、「同じ音でも人によって表現の仕方は異なるので面白い」、「当たり前のように聞こえていた音を意識して聞くと、聞こえ方が全く異なった」、「ありのままに自由に表現するという子どもの視点を体験することができた」、「音の表現においても、風はこの楽器がいいんじゃないかと多くの意見が出て、その意見を絞ることが難しかった」といった音をどのように捉え、表現に転換するか、その多様性に対する気づきに関する内容が見られた。このことから、音に対する意識や表現方法は人によって多様であり、それを共有し合うことで新たな発見が生まれるとともに、他者の視点への理解が深まることが読み取れた。

07グループでは、「手作り楽器」「作る」「傾ける」との関連性が強く、学生の記述には「音を自分の力でイメージして手作り楽器を作ることで、五感が刺激されると思った」、「手作り楽器を作った際に、どんな音が鳴るのかとワクワクした」という内容や、「保育現場でも子どもたちと身近な音を見つけて作る活動を取り入れることで、自然や周囲をよく観察する力や表現力が育まれると思う」という回答が見られた。このことから、音を通じた製作活動によって、自身の感性や感覚が刺激されたとともに、保育現場での実践にも応用可能であることを感じ取ったことがうかがわれる。

08グループでは、「試行錯誤」「イメージ」「発表」「澄む」との関連性が強く、学生の記述には、「グループの人と試行錯誤してぴったりくる音を見つけることができて嬉しかった」、「発表でもイメージと近い感じで表現できたので、頑張って良かったなと感じることができた」などの内容が見られた。このことから、試行錯誤を重ねながら他者と協力し、納得のいく音の表現方法を見つけることで満足感を得るとともに、発表を通じて、自らがイメージしたことを形にして表現で

きたことへの達成感を味わったことが分かる。

09のグループでは、「身の回り」「簡単」との関連性が強く、学生の記述には「自分の身の回りの音を表現することはあまり簡単ではなく難しかった」、「自分が聞いた自然の音を絵で工夫して表現するのは簡単ではなかったが、自由に表現することがとても楽しかった」という内容が見られた。このことから、身近な音を具体的に表現する難しさを感じつつも、自由な発想で取り組む楽しさを感じることができたことが読み取れる。

10のグループでは、「場所」「自分」との関連性が強く、学生の記述から「当たり前のように聞こえていた音を意識して聞くと聞こえ方が全く異なり、いつもの場所じゃないように思えてきた」、「自分が聞こえている音が全て正しいわけではない」などの内容が見られた。このことから、音を意識的に聞くことで自分の認識が必ずしも他者と一致するわけではないという気づきを得て、多様な視点を持つことの重要性を学んでいることが読み取れた。

11のグループでは、「絵」「書く」との関連性が強く、学生の記述から、「聞いた音の形を絵に書いてみることで音の特徴に気づいたり、想像力は深まったりすると思った」、「自分たちがそれぞれ聞こえてきた音をイメージしながら自由に書いたので、個性がたくさん詰まった作品になった」、「絵で表現するときにグループの人それぞれ違うことを書いていて、そういった書き方もあるのかと気付いて面白かった」などの内容が見られた。このことから、音を絵で表現することで、音の特徴を視覚的に捉える新しい視点が生まれ、創造性が刺激されたことが分かる。また、グループ内で互いの書き方を見比べる中で、他者の独自の解釈や表現方法を知り、新たな学びや発見につながったことが読み取れた。

#### IV. まとめと課題

全3回にわたる表現活動を通じて、学生たちは「音」に対する感性を磨きながら、表現力や創造力を深めることができたと考える。段階的に進められた活動の中で、学生たちは「音」を単なる聴覚的な刺激として捉えるのではなく、オノマトペや絵を用いて音の特徴を具体的に表現する過程で、多様な解釈が生まれ、個々の想像力が育まれる様子が見られた。

特に、第2回目以降では、絵やオノマトペを音色と

結びつけながら表現を深め、既存の楽器や自然物、生活素材を活用して独自の手作り楽器を製作するなど、創造力豊かな取り組みが行われた。その中で、グループでの協働を通じて他者の視点や意見を取り入れ、自身の表現を客観的に見直す姿勢も見られた。この過程を通じて、学生たちは個々の発想をグループ全体の表現へと昇華させ、音の進行や重ね方を工夫するなど、協働的な活動の中で発想をさらに広げることができたと考えられる。

第3回目の発表では、各グループで多彩な音の表現方法が披露され、既存の楽器を通常とは異なる奏法で演奏したり、身近な物を利用して音を生み出したりするなど、各グループの創意工夫が見られた。

また、質的データである学生の記述内容に関する分析方法として、探索的かつ量的な視点による分析を可能とした計量テキスト分析を用いた結果、11個の要因が抽出された。学生たちの記述からは、音に関する感覚的な気づき、表現方法の工夫、他者との協働を通じた新たな発見、そして保育現場への応用可能性に対する意識の高まりといった多くの学びを得ていることが明らかになった。

日常の中での音を意識的に捉える姿勢や、音を聴くことの大切さを改めて認識する学生が多く、音の存在を軽視しがちな日常生活において新たな感性が育まれたことが確認された(01、10グループ)。また、環境音や人それぞれの聞き方の違いを認識する中で、音に対する多様性を受け入れる柔軟な視点が醸成された(02、03、05グループ)。このような気づきは、保育現場で子どもたちが持つ独自の感性を理解し、尊重する上で重要な土台となるだろう。また、とくに最も出現頻度の高い抽出語である「音」を含む06グループに関する学生の記述として、「ありのままに自由に表現するという子どもの視点を体験することができた」という内容が見られた。この活動を通して、大人が当たり前と感じている物事を新鮮な目と耳で捉え直す契機となり、子どもがもつ独自の視点や柔軟な発想を学ぶ重要性を再認識した様子がうかがえる。この体験を通じて、学生自身が将来、子どもたちの視点に寄り添いながら関わることの姿勢が養われたと考える。

さらに、オノマトペや絵を活用する表現活動では、音の特徴を視覚的・言語的に捉える新たな方法を学び、それを通じて創造性や表現力が高まったことが示された(04、11グループ)。こうした具体的な手法を通じ

て、学生たちは音の理解をより深め、表現方法を工夫する力を培うことができたと思われる。また、手作り楽器の製作や音の表現方法を試行錯誤する過程で、自身の感性が刺激されると同時に、他者との意見交換や協力することの重要性を学ぶ貴重な経験にもなった(07、09グループ)。これらの経験は、音を介した子どもたちとの創造的な活動の実践にも活かされるだろう。

発表活動やグループワークにおいては、学生たちは自らのイメージを音で表現する達成感を味わいながら、他者の表現に触れることで新たな気づきを得ていることが読み取れた(08グループ)。また、音の捉え方や表現における多様性を学ぶことで、他者の視点を理解し受け入れる態度が育まれたことが把握できた(06、10グループ)。このような経験は、保育者としてのコミュニケーション力や協働性を高める上で重要な要素となり得る。

以上の結果から、本取り組みにおける「音を想像・創造する表現活動」は、学生の感性の育成、創造的な思考力の向上、多様な視点を受け入れる態度の醸成に寄与したと考えられる。これらの活動を通じて、学生たちは子どもたちの感性や創造力を引き出す保育者としての資質を養うことにつながったであろう。

今後の課題として以下の2点が挙げられる。

1点目は、絵で表現する際の材料の用意の仕方によって、出来上がる絵の傾向が偏る恐れがあるということである。そのため、様々な発想を引き出すためには、材料の種類や提供する方法を工夫し、多様性を持たせることが大切である。例えば、今回用意した材料に加えて、グラデーションなども表現しやすい絵具や、自然素材、リサイクル素材などを取り入れることで、より幅広い表現が可能となるだろう。また、学生たちが自主的に材料を選ぶ機会を設けることで、より個性豊かな表現を促すことも考えられる。

2点目は、本稿では学生による振り返りシートの分析を行ったものの、その前段階にあたるオノマトペの生成過程や、絵と音の表現の移行における具体的なプロセスの分析まで至らなかった点である。これらの過程をさらに深く研究することで、学生の創造力や表現力がどのように発展していくのかをより詳細に明らかにでき、音を中心とした表現活動の教育的意義を高めることにも繋がるかもしれない。

これらのことを踏まえ、今後も保育者を目指す学生

が音に対する感性を育み表現する実践方法を検討し、取り組みを継続していきたい。

#### 参考文献/引用文献

- 1) 文部科学省 (2018)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、p.244。
- 2) 横山真理 (2019)「保育内容領域『表現』の授業における学生の気付きを促す『音の散歩道づくり』の教材性」『東海学院大学研究年報』第4巻、pp.53-64。
- 3) 横山真理 (2020)「『音の散歩道づくり』の学習経験における保育者のリフレクション」『東海学園大学教育研究紀要』第4巻、pp.107-118。

